



特性羞恥感情尺度の作成

谷, 冬彦

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 20:41-45

(Issue Date)

2021-02-28

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013017>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013017>



特性羞恥感情尺度の作成 Development of the trait shame scale

谷 冬彦*
Fuyuhiko TANI*

要約:本研究では、これまで世界的に特性羞恥感情を測定する尺度がないことから、特性羞恥感情尺度を作成し、その信頼性および妥当性を確認した。Erikson (1959) の恥に関する記述をもとに項目を収集し、自己意識的感情研究を専門とする研究者によって内容的妥当性が確認された。409名の大学生に調査協力を依頼し、質問紙調査を行った。統計的分析を行い、主成分分析の結果から、一次元構造が確認され、9項目が選定された。 α 係数は高い値を示し、信頼性が確認された。また、多次元対人不安尺度および自尊心尺度との関連から構成概念妥当性における収束的妥当性が確認された。本研究は、これまで世界的に作成されていなかった特性羞恥感情尺度を作成したことに意義がある。

キーワード: 恥, 特性羞恥感情, 特性羞恥感情尺度, 信頼性, 妥当性

1. 問題

恥 (shame) とは現実または想像上の他者により批判される有害な (malignant) 自己を意味する (Lewis, 1971; Tangney, 1991)。恥は苦痛を伴い、自己の価値観や自己効力感への直接的脅威を意味する自己批判の経験である (Tangney, Wagner, & Gramzow, 1992)。また、恥は、不適応な自己機能を導く恐れがあり (Tangney, 1995)、恥特性 (shame proneness) と、アイデンティティ・スタイルにおける拡散志向と正の相関があることが示されている (Lutwak, Ferrari, & Cheek, 1998)。

恥は人類に普遍的な現象であるとされているが、しかし、日本における恥の心理学的研究はきわめて少数であり、恥の問題は主に対人恐怖の研究や日本人論の一部として扱われ、実証的な検討を行ったものは限られている (菅原, 1998)。恥に関する尺度も同様に数が少ない。後述するように、恥は主に状態と特性の2側面から構成されているが、特性に焦点を当てた研究・尺度は存在しない。状態による恥を測定する尺度には、我が国においては、成田・寺崎・新浜 (1990) における恥への対処行動の測定法に基づいた状況別羞恥感情尺度が存在するものの、信頼性・妥当性の検討が十分に行われているとは言いがたい。

一方、海外では過去30年間、恥の役割に焦点を当てた研究の

数が増加している。このような研究数の増加により、恥を評価するための有効な心理測定具の開発が必要になった。

Harder, Cultler, & Rockart (1992) は、恥と罪悪感を測定する Personal Feelings Questionnaire (以下では PFQ と略記する) を改訂して改訂第2版である PFQ-2 を作成している。しかし、これは人格形容詞を用いた尺度で、恥に関する測定項目内容を見ると、恥を直接的に測定する内容になっていない。また、大西 (2008) が指摘しているように、恥と罪悪感の弁別がつかなく、問題がある尺度である。

また、Internalized Shame Scale (Cook, 1994, 2001; 以下では ISS と略記する) は、青年と成人の羞恥感情を測定するために設計された30項目からなる尺度である。ISS は多くの博士論文や研究論文で使用されており、再検査信頼性や内的整合性において高い信頼性を示したことが明らかになっている。しかし項目内容を吟味すると、恥によって引き起こされる精神状態について質問するものばかりで、これも PFQ-2 と同様に、直接的に恥を測定する尺度ではない。そのため、特性としての恥を測る尺度としては不適切であると考えられる。

PFQ-2, ISS の他には、Tangney とその共同研究者らは、Lewis (1971) による恥と罪悪感の議論を踏まえ、両概念を弁別して測

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授

定できる Test Of Self-Conscious Affect (以下では TOSCA と略記する) を作成しており、これが恥と罪悪感を測定する尺度として代表的なものである (Tangney et al. 1992)。

Tangney らは、恥と罪悪感は同一の状況で生じることが多いため、これらを弁別するためには調査協力者に状況の手がかりを与える仮想シナリオ形式が有効であると考えている。そのため、恥や罪悪感を喚起するような失敗状況を提示し、そのような状況に置かれた際にどのように反応するかを評定させるのである。選択肢は 1 つではなく、恥と罪悪感 (他に誇りや責任の外在化などがある) に対応する複数のものが提示され、それぞれ自分にどの程度当てはまると思うかを “あまりあてはまらない” から “全くあてはまる” までの 5 段階で評定させる。Tangney らは、失敗を全体的な自己 (global self) に帰属した際に恥が生じ、特殊的な自己の行為 (specific action) に帰属した際には罪悪感が生じると考えているため、恥の項目には恥を意味すると仮定されている反応 (全体的自己への失敗の帰属、逃避など) が、罪悪感の項目には罪悪感を意味すると仮定されている反応 (自己の行為への失敗の帰属、謝罪、補償行為など) が用意されている。Tangney et al. (1992) によると、これによって、恥と罪悪感という言葉に対する個人の言語的な解釈に影響を受けずに測定が可能であるとしている。TOSCA は、恥や罪悪感を導くような状況をどのように認知し、反応するかについての個人差を測定しているものであり、Tangney et al. (1992) はこれを感情スタイル (affective style) にもとづく罪悪感特性 (guilt proneness) あるいは恥特性 (shame proneness) と呼んでいる。TOSCA によって測定されるものを罪悪感特性、恥特性としているが、これらはあくまでも、シナリオ提示による反応を測定しており、「特性」というより、「状態」に近いものと思われる。

さらに、現在のところ、PsycINFO や PsycARTICLES で “trait shame scale” を検索すると、一つもヒットしない。“trait shame” を測定しているとしている論文でも、実際には、TOSCA による恥特性 (shame proneness) を測定しているものしかない。また、日本でも、恥特性としている論文は、成田他 (1990) の状況別羞恥感情尺度によって測定しているものしかなく (有光, 2001 など)、状態としての恥しか測定していない。

以上のことより、これまで特性としての恥に着目し、それを的確に測定できる尺度は存在しないと言えるであろう。

そこで本研究は、恥の 2 側面のうち特性を測る尺度を作成することを目的とする。尺度作成にあたっては、恥の概念について整理する必要があるが、ここでは大西 (2008) が、罪悪感について「状態」と「特性」の概念を整理したように、不安における「状態」と「特性」の区別 (Spielberger, Gorsuch, & Lushene, 1970) の例にならって考える。Spielberger et al. (1970) によると、状態不安と特性不安は、即時的なものであるか否かによって区別されるとされ、状態不安は、「特定の場面で感じられる、現在の不安状態」であるため、どのような状況に置かれているかという状況規定が大きな意味をもっており、状況によって測定値が変化する。一方の特性不安は、状況によって影響を受けず、慢性的に感じられる不安のことであり、不安に関するパーソナリティ特性を意味する (大西, 2008)。本研究では、両概念の定義を大西 (2008)

や Kugler & Jones (1992) に依拠して次のように定義する。すなわち特性羞恥感情は、「恥に関する安定したパーソナリティ特性であり、即時的な状況を越えて内的に潜在する恥の感覚」を意味し、状態羞恥感情は、「状況に依存する即時的な感情状態を反映した今現在感じている恥の強さ」を意味する。先述した成田他 (1990) の状況別羞恥感情尺度は、この状態羞恥感情を測ったものであると考えられ、具体的な場面設定を行った後にどのように恥を感じたのかを測る尺度となっている。本研究では、状態としての羞恥感情ではなく、恥を感じることに對するパーソナリティ特性を意味する特性羞恥感情に焦点を当て、測定できる尺度を作成することを目的とする。

なお、大西 (2008) は、罪悪感についてパーソナリティ特性的な観点から議論が行われている精神分析理論に依拠して、特性罪悪感尺度を作成している。ここでも、同様に、恥に関してもパーソナリティ特性的な観点から論じられている精神分析理論に依拠して、特性羞恥感情を測定する尺度を作成することにする。ただし、大西 (2008) においては、罪悪感について精神分析的立場から論じている複数の研究者 (Erikson, Modell, 土居, 北山) がいることから、4 次元を想定し、罪悪感を測定する多次元尺度を構成しているが、恥について明確に論じている精神分析学者は Erikson のみである。したがって、本研究では、Erikson (1959) の論述に依拠し、特性羞恥感情を測定する一次元尺度を構成することとした。

次に、対人不安尺度との関連を明らかにすることで、特性羞恥感情尺度の構成概念妥当性を確認する。

対人不安とは、「現実の、あるいは想像上の対人場面において他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」とされている (Schlenker & Leary, 1982)。

対人不安は、従来の論文のなかで、対話懸念 (communication apprehension)、異性不安、シャイネス (shyness)、あがり症 (stage fright)、困惑 (embarrassment) などの異なる用語で記述されていた現象を、いずれも対人場面において経験する不安であるという点で共通することから Leary (1983) によって「対人不安」として統合された概念である。

この定義にみられるように、他者からの評価に接することが対人不安を引き起こす要因となっているが、それは特に否定的な評価が問題となっており、したがって対人不安においても、他者から否定的に評価されるのではないかという恥の意識がその中心にあると考えられる (大西, 2008)。

以上より、恥と対人不安には関連があるといえる。恥は知覚した失敗経験によって喚起される、安定的かつ全般的な自己に対する否定的評価の結果として生ずる感情である。一般に、恥によって人は失敗を自己全体に帰属させるため、自己評価の低下がもたらされ、抑うつや不安といった精神的健康度の低下が引き起こされる (有光, 2001)。つまり、失敗経験によって喚起された恥が、対人不安を高めるのである。よって、作成した尺度は、恥と関連があると想定される対人不安尺度との相関をみることで構成概念妥当性における収束的妥当性を確かめることができると考えられる。また、対人恐怖が日本文化的特質と結びつけられて論じられるのに対して、対人不安にはそのような議論がなく、普遍的な対

人的問題と捉えられているため、本研究では対人不安を取り上げて、その関連を検討する。

加えて、自尊心との関連も検討していく。Rosenberg (1965) は、自尊心を自己に対しての態度であるとして、自尊心を測定する尺度を作成した。さらに、Rosenberg は、自尊心が高いということは、他者と比較して優越感や完全性を感じるのではなく、自分自身の価値基準に照らして自分を価値のある人間だと尊重することだとしている。先述したように恥は失敗状況での出来事を「全体的な自己」に帰属させるため、自尊心が高い人間は特性羞恥感情が低く、自尊心が低い人間は特性羞恥感情が高くなると考えられる。

これらのことから、特性羞恥感情尺度は一次元構造を持ち、対人不安尺度とは高い正の相関、自尊心尺度とは高い負の相関が示されると考えられる。

したがって本研究においては、特性羞恥感情尺度の一次元構造や信頼性を確認するとともに、対人不安尺度・自尊心尺度と関連から構成概念的妥当性の検討を行い、特性羞恥感情尺度を作成することを目的とする。

2. 方法

●調査時期及び調査協力者

2019年10月から12月にかけて近畿地方の大学生に、講義中に口頭で質問紙調査の説明を行い、同意が得られた者に調査協力依頼を行った。「大学生の日頃の意識に関する調査」として協力を求め、その場で質問紙を配布し、当日に回収した。回答者のうち、回答に不備がなかった409名(男182名、女227名、平均年齢は19.60歳、 $SD=1.14$ 、範囲は18~25歳)を分析対象とした。

質問紙の構成

1. 特性羞恥感情項目

尺度項目はErikson (1959)の発達段階の第II段階における恥に関する記述を参考にしながら、独自項目を新たに作成した。次に、自己意識の感情研究を専門とする大学教員1名により、項目の内容的妥当性が検討され、最終的に12項目が選定された。「全くあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「どちらでもない」「少しあてはまる」「非常にあてはまる」の5件法(1~5点)で評定を求めた。

2. 多次元対人不安尺度

対人不安を測定する尺度として、対人不安を多次元から測定できる陳・谷(2004)による「多次元対人不安尺度」を使用する。この尺度はLeary (1983)の議論に基づいて対人不安の概念を整

理したことにより、5つの下位尺度から構成されている。加えて、対人恐怖の心性との間に弁別性があることが確認されており、従来の対人不安尺度と比較して信頼性・妥当性が高く、より多次元的に対人不安概念を捉えられるため、本研究に適している尺度と言える。「聴衆不安(6項目)」「交渉不安(7項目)」「集団不安(6項目)」「長上不安(6項目)」「異性不安(6項目)」の5つの下位尺度で構成されており、信頼性・妥当性が確認されている。全31項目。「全くあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「どちらでもない」「少しあてはまる」「非常にあてはまる」の5件法(1~5点)。本研究における α 係数、平均値(SD)は、「聴衆不安」で、 $\alpha=.907$, 20.5 (5.70)、「交渉不安」で、 $\alpha=.867$, 24.0 (5.40)、「集団不安」で、 $\alpha=.824$, 17.0 (5.45)、「長上不安」で、 $\alpha=.875$, 19.2 (5.22)、「異性不安」で、 $\alpha=.923$, 18.2 (6.22)全体尺度で、 $\alpha=.944$, 99.0 (21.8)であった。

3. 自尊心尺度

山本・松井・山成(1982)によって作成されたRosenberg (1965)のSelf-Esteem Scaleの邦訳版全10項目を使用することにした。しかし、主成分分析の結果から、項目8は第1主成分負荷量が低く、不適切であるとの見解が多い(伊藤, 2001; 谷, 2001など)。したがって、項目8は除くこととし、それ以外の9項目を採用することとした。「全くそう思わない」「そう思わない」「どちらでもない」「そう思う」「非常にそう思う」の5件法(1~5点)。 α 係数、平均値(標準偏差)は、 $\alpha=.904$, 29.3 (7.01)であった。

3. 結果

(1) 特性羞恥感情尺度の主成分分析

一次元構造が仮定されるため、特性羞恥感情項目の12項目について主成分分析を行った。第3主成分までについての結果をTable1に示す。それによれば、いずれの項目においても、第1主成分負荷量が.529~.795と高かった。第1主成分から第3主成分までの寄与率は、45.25%, 9.78%, 9.16%となっており、第1主成分への寄与率が高く、また第2, 3主成分では寄与率が大きく落ち込んでいる。固有値についても同じ傾向があり、第3主成分までの固有値は順に、5.43, 1.17, 1.10と、第1主成分から第2主成分に欠けて大きく落ち込んでいる。したがって、特性羞恥感情尺度は一次元構造をもっていることが確認された。しかし、項目1, 8, 9については、第2, 3主成分への負荷量も相対的に高いことなどを考慮し、それら3項目を除いた計9項目を最終的に採用することとし、その9項目を以て特性羞恥感情尺度とすることにした。平均値(SD)は、36.54 (7.99)であった。

Table1

特性羞恥感情尺度の主成分分析結果

		PC1	PC2	PC3
1*	他人からどう思われているかは特に気にならない。	.586	-.571	.409
2	私は人前に出る際、恥をかくのを避けたくて逃げたい気持ちになる。	.657	-.077	-.433
3	自分が人前で何か恥ずかしい失敗をしてしまうのではないかと感じることもある。	.738	.017	-.333
4	恥ずかしくて消えてしまいたいと思うことがよくある。	.746	.226	.035
5	私は何かに失敗したとき他人に笑われてしまう気がする。	.745	.213	.021
6	他人からの視線にさらされていると強く感じることもある。	.699	.107	.162
7	恥をかく可能性が少しでもある場合は、それを回避したいと思う。	.688	-.164	-.421
8*	私は他人の視線が気にならない。	.623	-.527	.334
9	私は、自分という存在を恥ずかしく思っている。	.529	.565	.236
10	恥ずかしい記憶をなかなか忘れることができない。	.580	.371	.259
11	必要以上に人の視線を気にする。	.795	-.059	.228
12	たとえどんな状況であっても、人前で恥をかくのは避けたいと思う。	.635	-.130	-.376

*は、逆転項目を示す。

(2) 尺度の信頼性

特性羞恥感情尺度に関しては、全調査協力者 409 名のデータについて、 α 係数を算出したところ、 $\alpha=.876$ であり、9 項目という項目の少なさに対して高い値を示した。このことから、作成した特性羞恥感情尺度は、尺度全体として一貫した概念を測定していると考えられる。よって内的整合性の観点から、高い信頼性を有することが確認できたとと言える。

(3) 尺度の妥当性

各尺度の相関係数を Table2 に示す。特性羞恥感情尺度と多次元対人不安尺度・自尊心尺度との相関係数を求めたところ、すべて 0.1%水準で有意な相関係数であった。

特性羞恥感情と対人不安については、全体的に高い正の相関係数 ($p<.001$) を示し、関連性が高いことが示唆された。対

人不安の下位尺度ごとに見ていくと、聴衆不安との相関係数の値が $r=.649$ と最も高かったが、他の 4 つの下位尺度とも、いずれも高く、相関係数の違いはそれほど明確ではなかった。なお、特性羞恥感情尺度と多次元対人不安尺度全体とは、 $r=.622$ ($p<.001$) と高い相関係数を示した。

次に特性羞恥感情尺度と自尊心尺度については、 $r=-.521$ と高い負の相関係数 ($p<.001$) を示し、関連性が高いことが示された。

これらの結果より、構成概念妥当性における収束的妥当性の観点からは、予想されたように多次元対人不安尺度とは高い正の相関係数、自尊心尺度と高い負の相関係数が確認され、構成概念妥当性が示された。

Table2

各尺度の相関係数

	特性羞恥感情	自尊心	聴衆不安	交渉不安	集団不安	長上不安
自尊心	-.521 ***	—				
聴衆不安	.649 ***	-.354 ***	—			
交渉不安	.400 ***	-.258 ***	.538 ***	—		
集団不安	.532 ***	-.416 ***	.676 ***	.462 ***	—	
長上不安	.418 ***	-.261 ***	.521 ***	.496 ***	.374 ***	—
異性不安	.446 ***	-.255 ***	.574 ***	.530 ***	.530 ***	.449 ***

*** $p<.001$

4. 考察

本研究では、恥の概念整理を行い、特性としての恥に着目した尺度を作成した。これまで特性としての恥に関する研究は、ほとんど行われておらず、また恥のどの側面を測定しているのか明確でなかったこともあり、特性羞恥感情に特化した尺度を開発した点において、恥研究に関して、本研究の果たした意義は大きいと言えるだろう。

今後の課題としては、本研究では、信頼性として、 α 係数を用いることで内的整合性の確認はできたが、再検査法による安定性を確認することができなかつたため、この点についてさらなる検討を行う必要があると考えられる。特に、特性羞恥感情という「特性」を測定している本研究における尺度においては、尺度得点の時間的安定性を示す再検査信頼性係数を算出することは必要であろう。

また、妥当性については、構成概念妥当性における収束的妥当性の確認のみに終わったが、弁別的妥当性の検討も、今後必要であろう。

さらに、今回は、日本人の調査協力者のみのデータに終わったが、今後、海外でのデータも収集し、今回作成した特性羞恥感情尺度の通文化的妥当性を検討することも課題であろう。

最後に、今回作成した特性羞恥感情尺度を用いて、特性羞恥感情が、アイデンティティ形成や自己形成、および対人関係、精神的健康などと、どのような関係にあるかを検討することも今後の課題と言えるであろう。

引用文献

- 有光 興記 (2001). 罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係. 性格心理学研究, 9, 71-86.
- 陳 愛玲・谷 冬彦 (2004). 新たな多次元対人不安尺度の作成に関する研究. 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 273.
- Cook, D. R. (1994, 2001). *Internalized shame scale: Technical manual*. North Tonawanda, NY: Multi-Health Systems, Inc.
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W. Norton & Company.
- Harder, D.W., Cultler, L., & Rockart, L. (1992). Assessment of shame and guilt and their relationships to psychopathology. *Journal of Personality Assessment*, 59, 584-604.
- 伊藤 裕子 (2001). 青年期女子の性的同一性の発達: 自尊感情, 身体満足度との関連から. 教育心理学研究, 49, 458-468.
- Kugler, K. E., & Jones, W. H. (1992). On Conceptualizing and Assessing guilt. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 318-327.
- Leary, M.R. (1983). *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives*. California: Sage.
- Lewis, H.B. (1971). *Shame and guilt in neurosis*. New York: International Universities Press.
- Lutwak, N., Ferrari, J.R., & Cheek, M. (1998). Shame, guilt, and identity in men and women: The role of identity orientation and processing style in moral artifacts. *Personality and Individual Differences*, 25, 1027-1036.
- 成田 健一・寺崎 正治・新浜 邦夫 (1990). 羞恥感情を引き起こす状況の構造. 人文論究 (関西学院大学文学部), 40, 73-92.
- 大西 将史 (2008). 青年期における特性罪悪感の構造—罪悪感の概念整理と精神分析理論に依拠した新たな特性罪悪感尺度の作成. パーソナリティ研究, 16, 171-184.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Schlenker, B.R., & Leary, M.R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
- 菅原 健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか. サイエンス社
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R.E. (1970). *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
- Tangney, J. P. (1991). Moral affect: The good, the bad, and the ugly. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 598-607.
- Tangney, J. P. (1995). Shame and guilt in interpersonal relationships. In Tangney, J.P., & Fisher, K.W. (Ed.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press, pp.114-139.
- Tangney, J. P., Wagner, P., & Gramzow, R. (1992). Proneness to shame, proneness to guilt, and psychopathology. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 469-478.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.

付 記

本論文の作成にあたり、項目の内容的妥当性の検討から、論文校閲に至るまで、丁寧なご教示をいただきました福井大学准教授大西将史先生に深く感謝いたします。

また、本論文は、2019年度の神戸大学発達科学部卒業論文において、佐々田みのり氏が収集したデータを、佐々田氏の了承を得て、再分析し、新たに執筆したものである。